

自国史の検証:

リトアニアにおけるホロコーストの記憶をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/39966

第6章 自国史の検証

——リトアニアにおけるホロコーストの記憶をめぐって——

野村真理

はじめに

2003年4月のバグダッドで、フセイン元イラク大統領の立像が引きずり倒された。そのとき私たちが目にした市民の反応は演出だったのかどうか、確実な情報をもたない者が余計なことを言うべきではない。しかし、いずれにせよあのときアメリカが期待したのは、巨大なレーニン像が引きずり倒されたとき、旧ソ連の市民たちのあいだでわき起こった歓声の再現だっただろう。歓声は、自由の喜び、未来への希望の表れだった。

私が2003年9月に訪問したリトアニアの首都ヴィリニウスにも、もはやレーニン像はない。レーニン広場やレーニン通りなど、ソ連時代を思い出させる地名は街から一掃され、多くはそれ以前の名称にもどった。ソ連時代に学校教育を受けた人々のあいだでは、半ば公用語扱いだったロシア語に対する嫌悪感も激しい。いくつかの博物館では、独立後、リトアニア語の説明だけを残し、併記されていたロシア語の説明は剥ぎ取られたり、塗りつぶされたりした。私たち外国人観光客はわざわざそんなことをしなくてもと思うが、リトアニア人にとって、問題は手間やコストではないのである。

こうして視界からソ連時代の痕跡を消し去り、いま人々は第一次世界大戦後に独立を達成したときの国家の原点に立ち返って、誰にも干渉されないリトアニアの歴史を再出発させようとしている。これは、みずからは望まずしてソ連に組み入れられたバルト三国に共通する気分だ。リトアニアと同じく1991年に独立したラトヴィアは、かつて1922年に公布された憲法を修正なしに再導入し、第二次世界大戦後のロシア人移住者に対してラトヴィア国籍の付与を容易に認めようとはしなかった。

表1 リトアニアの人口構成 (2001年)

リトアニア人	284万人	81.4%
ロシア人	29	8.3
ポーランド人	24	6.9
ベラルーシ人	5.2	1.5
その他	6.8	1.9
計	349	100

出所)『世界年鑑』共同通信社, 2003年, 600頁。

表2 リトアニアの人口構成 (1923年)

リトアニア人	1,701,863人	83.9%
ユダヤ人	153,743	7.6
ポーランド人	65,599	3.2
ロシア人	50,460	2.5
ドイツ人	29,831	1.4
ラトヴィア人	14,283	0.7
ベラルーシ人	4,421	0.2
その他	8,771	0.5
計	2,028,971	100

注) その他の8,771人のなかには7,179人の無国籍者が含まれ, そのうち1,382人はユダヤ人である。

出所) Dov Levin, *The Litvaks*, Jerusalem 2000, p.128.

しかしリトアニアの歴史とは何だろうか。それはリトアニア人の歴史のことだろうか。リトアニアの歴史とリトアニア人の歴史を同一視することによって、検証されぬまま忘却される歴史がありはしないだろうか。

戦間期の独立国リトアニアと現在のリトアニアは、名称こそ同じだが、国境も、その中身も同じではない。1922年にリトアニアの独立が国際的に承認されたとき、現在のリトアニアの首都ヴィリニユスはポーランドの領土だった。そして戦間期と現在とでは、国境内に住む住民の民族構成も大きく異なる。表1と表2を見れば、ソ連時代のロシア人の移住が現在のリトアニアのロシア人口比率の高さとなって現れている一方、戦間期リトアニアの最大の少数民族であったユダヤ人は、第二次世界大戦をはさんで姿を消した。

本章で取り上げるのは、このリトアニアのユダヤ人の問題にほかならない。リトアニアでは、ユダヤ人社会の消滅はいかにして進められたのか。そのこ

とは、リトアニア人のあいだでどのように記憶されたのだろうか。

1 リトアニアの独立とユダヤ人問題

(1) リトアニアの独立

1918年11月11日、ドイツが休戦条約に調印して第一次世界大戦が終了した後、ヨーロッパの東ではなお2年にわたって戦闘が継続していた。このことは、西ヨーロッパ史に知識が偏る日本では、あまり知られていないかもしれない。1917年十月革命によってソヴィエト政権が樹立されたロシアでは、赤軍が政権の存亡をかけ、反革命軍および軍事干渉に乗り出した外国軍と戦い、他方、十月革命後あいついで独立宣言を発したバルト三国では、それぞれの国で創設された軍隊が自国の存亡をかけて赤軍と闘っていた。さらに1920年4月には、領土拡大をめざすポーランドとソヴィエト・ロシアのあいだで戦闘が始まり、ようやく10月にいたって戦線は膠着した¹⁾。

そのさい、それらの戦闘の成り行きを見守る国際社会において、いち早く独立の承認を得ていたのはポーランドのみである。「ウィルソンの14箇条」として知られる1918年1月8日のアメリカ大統領ウィルソンの議会演説では、第一次世界大戦の戦後処理に関して、ドイツ、オーストリア＝ハンガリー、オスマンの各帝国に関係する諸民族の自治や独立、あるいはポーランド国家の回復については具体的に言及されたのに対し、ロシア帝国については、ロシア自身による決定が強調されるにとどまり、ポーランドを例外としてロシア帝国内の諸民族への言及はない。当時の連合国は、ソヴィエト政権をロシアの正当な主権代表者とは認めず、したがってバルト三民族のような旧ロシア帝国内の諸民族の処遇は、旧帝国の後継国家が成立してはじめてロシアによって解決されるべき問題と考えていた。

そもそも連合国は、ポリシェヴィキの影響が西に広がることを警戒する一方で、バルト三民族に対する軍事援助には必ずしも積極的ではなかった。すでに独立を宣言したバルト三民族に梃子入れすれば、かえってバルト三民族とソヴィエト・ロシアの戦争が国家間戦争の様相をおび、事実上それは、ソヴィエト・ロシアを国家として承認することにつながるからである。結局エ

ストニアは連合国から独立の承認を得られないまま、バルト三国のなかでは最初に1920年2月2日のタルトゥでソヴィエト・ロシアとのあいだに平和条約を締結した。そして同時にエストニアとソヴィエト・ロシアは、相互に独立主権国家であることを認めあう最初の国になったのである。これにリトアニアとラトヴィアが続き、それぞれソヴィエト・ロシアと平和条約を締結した。バルト三国の独立が連合国によって承認されたのは、エストニアとラトヴィアは1921年1月末、リトアニアにいたっては1922年6月末のことである。

皮肉なことに、1922年に結成されたソヴィエト社会主義共和国連邦は、旧ロシア帝国の動かしがたい後継国家となり、やがてバルト三民族を再び自国へと回収してしまうのだが、以下に、リトアニア独立の経緯を簡単にまとめておきたい。

リトアニアは、1795年の第三次ポーランド分割以後、第一次世界大戦まで、ナポレオンに占領された一時期を除き、ロシア帝国の支配下にあった。この状況が大きく変わるのは第一次世界大戦中、1915年5月から9月にかけて、リトアニア全土がドイツの占領下に入ってからである。ドイツによる占領は、ロシアからの離脱を求めるリトアニアの民族主義運動に弾みをつけた。ドイツの目論見はもちろんリトアニアの植民地的支配以外の何ものでもなかったが、しかし1917年にロシア二月革命が起ると、革命の波及を恐れるドイツにとって、リトアニアの人心の把握は無視できない問題となる。リトアニア民族主義者の意を迎えるためドイツは、スメトナらリトアニア人の代表20名からなる「評議会(タリバ)」の成立を承認し、ロシア十月革命後の11月29日、このタリバによってリトアニアのロシア帝国からの離脱が宣言された。そして翌1918年2月16日には、ヴィリニウスを首都とする独立国リトアニアの創設が国内外に宣言される。ドイツは、リトアニアがドイツと軍事、交通、関税、通貨の各面で友好関係を保つべきことを確認し、3月23日、リトアニアの独立を承認した。

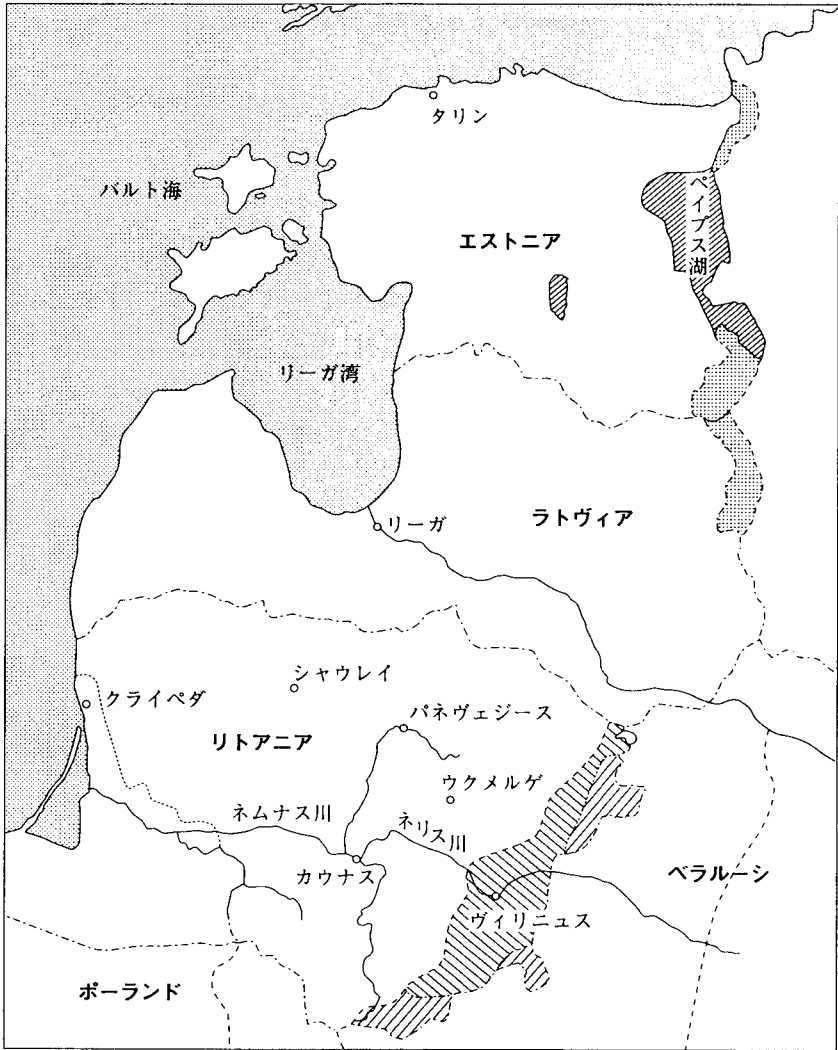
しかし独立とは名ばかりで、リトアニアでは依然としてドイツの占領状態が続いていたが、これに終止符を打ったのがドイツの敗北である。ドイツが休戦協定に調印したのと同じ11月11日、ヴォルデマーラスを初代首相とする

リトアニア初の政権が樹立された。

ところが先に述べたように、連合国はリトアニアの独立を承認せず、そこに侵攻を開始したのが、バルト地域でポリシェヴィキ政権の樹立をめざすソヴィエト・ロシアである。赤軍は1919年1月6日、首都ヴィリニウスを陥落させてリトアニア・ソヴィエト共和国の樹立を宣言した。リトアニア政府はカウナスへと逃亡したが、1月末、赤軍はカウナスにも迫る勢いであった。そこで窮地に陥ったリトアニア政府が支援を要請したのは、戦後もリトアニアに残留していたドイツ軍である。創設されたばかりのリトアニア軍は、はじめはドイツ軍の協力を得て、6月にドイツ軍が本国に撤収してからは独力で赤軍と戦い、ようやく8月末、リトアニア全土の解放を勝ち取ることに成功した。翌1920年7月12日、リトアニアはソヴィエト・ロシアと平和条約(モスクワ条約)を締結した。

こうして、あたかも1939年以後の展開を予示するかのようには、リトアニアの独立にはドイツとソヴィエト・ロシアという二つの強国の影がつきまとったのだが、さらにこの時期リトアニアを脅かしたのが隣国ポーランドである。モスクワ条約でソヴィエト・ロシアは、旧ロシア帝国のヴィリニウス県をリトアニアの領土と認めたが、このときヴィリニウス県の帰属をめぐるリトアニアとポーランドの紛争は未解決のままであった。1919年4月にリトアニアが赤軍と闘っていたとき、ポーランド軍はヴィリニウスを攻略してリトアニア・ソヴィエト共和国を崩壊させ、その後もその地に居座り続けていたからである。1920年4月に始まったポーランドとソヴィエト・ロシアの戦争のあいだ、6月後半から攻勢に転じた赤軍がポーランド軍の手からヴィリニウスを奪還し、モスクワ条約での合意にもとづき、8月26日、これをリトアニアに明け渡したが、リトアニアのヴィリニウス支配は1カ月半しか続かなかった。10月7日にリトアニアとポーランドのあいだで結ばれた停戦協定で、リトアニアのヴィリニウス領有が合意されたにもかかわらず、翌10月8日、ポーランド軍は停戦ラインを突破し、ヴィリニウス県を再びその支配下におく。その上でポーランドは、ヴィリニウス県をポーランドから切り離して中部リトアニアという共和国の建国を宣言させ、1922年1月8日に国会議員選挙

国境線の変遷



---- 1938年の国境線

..... 1940年6月のリトアニアの国境線

- · - · - 1945年以後の国境線

▨ 1939年にリトアニアに帰属した地域

▩ 1940年にリトアニアに帰属した地域

伊東孝之・井内敏夫・中井和夫編『ポーランド・ウクライナ・バルト史』（山川出版社、1998年）の279頁の地図を参考にして作成した。

を実施させた(リトアニア人とユダヤ人は選挙をボイコットする)。そして、形式的にはこの国会が中部リトアニアのポーランドへの合邦を議決して、ヴィリニウス県はポーランド領となる。国際社会もこの結果を承認した。連合国がリトアニアの独立を正式に承認したのは、ヴィリニウスの帰属問題がリトアニアには承伏しがたいかたちで解決された後の1922年6月末である。戦間期リトアニアの首都はカウナスにおかれることになった。ただし、地域ごとに偏りがあるものの、当時のヴィリニウス県の人口の6割以上はポーランド語の使用者である。都市ヴィリニウスもまた、中世の大国家リトアニア大公国の首都であったという歴史的経緯を別にすれば、1921年のポーランドの統計で、街の人口12万8972人の約40%がポーランド人であり、それに次ぐのがユダヤ人の36%であった。

(2) リトアニア人とユダヤ人

1923年9月17日、クライペダ²⁾を除くリトアニア全土で国勢調査が実施された。それによれば、リトアニアの国土は北海道の約3分の2、総人口は202万8971人で、その民族構成は表2のとおりである。これを見れば、リトアニアはリトアニア人が圧倒的多数を占める国家であった。ユダヤ人は、最大の少数民族といえども人口わずか15万人強でしかない。そのユダヤ人の存在が、戦間期のリトアニアで、なぜ社会問題視されるようになったのか。

まずはじめに考えられる理由の一つは、ユダヤ人は、リトアニアの都市や職業構成に着目すれば、きわめて目立つ存在だったことである。すなわちポーランド人やドイツ人少数民族の居住地が、それぞれポーランドとの国境地帯や、第一次世界大戦まで東プロイセンの一部であったクライペダにはば集中していたのに対し、ユダヤ人はリトアニアの全土に分散して居住していた。そのさいリトアニア人とユダヤ人は、均等に混じり合っていたのではない。1923年当時でリトアニア人の84.5%が農業に従事し、そのほとんどが農村地帯に居住していたのに対し、ユダヤ人の主たる職業は、職人業を中心とする工業(21.6%)と商業・金融業(30%)であった。ユダヤ人で農業に従事する者は6%にすぎない³⁾。

この職業構成の相違に対応して、ユダヤ人口の約27%が首都のカウナス以下、シャウレイ、パネヴェジース、ウクメルゲの四大都市に集中していた。1923年の統計で、リトアニアで最大のユダヤ人口(2万5044人)をもつカウナスでは、市の人口に占めるユダヤ人の割合は約31%、リトアニア第二の都市シャウレイでは約25%、パネヴェジースやウクメルゲでは35%から37%近くに達する。残りの者たちもほとんどが農村地帯に点在する中小の町に居住し、人口の半数以上がユダヤ人という町も珍しくはない。しかもリトアニア人とユダヤ人は、現代に比べれば比較にならないほど狭い都市や町で居住空間を共にしながら、言語、宗教、風俗・習慣のすべてにおいて、はっきり区別される異民族だった⁴⁾。

このことをまず言語についてみると、第一次世界大戦後にリトアニアが独立するまで、ユダヤ人同士のあいだで使用されたのはイディッシュ語あるいはヘブライ語であり⁵⁾、ユダヤ人が修得すべき他民族の言語は、第一に支配者の言語であるロシア語であった。ロシア帝国支配下のリトアニアでは1860年代後半からロシア化政策が強化され、学校教育はロシア語のみで行われた上、リトアニア文字の使用も、リトアニア文字で書かれた書物の輸入も販売も禁止された。実際にはプロイセンからかなりの量のリトアニア語の書物が密輸され、流通していたが、それでもリトアニア語の識字教育やリトアニア語文化の発展が阻害されたことは言うまでもない。独立時でリトアニアの成人のリトアニア語識字率は56%程度である⁶⁾。ユダヤ人が無学なりトアニア人の農民を相手に小商売をするには、片言のリトアニア語で事足りる。ユダヤ人にとってリトアニア語は、社会的にも文化的にも学ぶ価値の乏しい言語であった。

独立後のリトアニアは、リトアニア語とは異なる言語を使用する少数民族に対し、民族語で義務教育を受ける権利を憲法によって保障する。1クラスに32人以上のユダヤ人の児童がいる地域では、イディッシュ語あるいはヘブライ語で教育を行う小学校が設立され、国家から他の小学校とまったく平等の予算措置を受けることができた。そこで教える教師は国家公務員である。このように少数民族言語での教育が制度的に保障されたことは、たとえば隣

国のポーランドで、ポーランドの総人口の14.4%を占めたウクライナ人や10.6%を占めたユダヤ人の文化的、言語的権利がないがしろにされたのに比べ、特筆すべきであろう。

ただし少数民族言語による教育校でも、2年次からはリトアニア語の学習が義務づけられ、大学のような高等教育機関で使用されたのはリトアニア語のみである。そのため若いユダヤ人は、修得すべき言語をロシア語からリトアニア語へと切り替えるが、ユダヤ人のみの言語であるイディッシュ語やヘブライ語を放棄することはなかった。1936年当時で、ユダヤ人の小学生のうち、リトアニア語による教育校に通う者の割合は約20%である⁷⁾。

次に宗教について言えば、宗教的無関心と世俗化が進んだ西ヨーロッパと異なり、東ヨーロッパでは、キリスト教でもユダヤ教でも、なお宗教が人々の生活のあり方を強く規定していた。ほとんどが敬虔なカトリックのリトアニア人のなかであって、ユダヤ人は、リトアニア人とは異なる暦で新年をスタートさせ⁸⁾、週の異なる日に安息し、異なる宗教的祝祭日を1年の節目としながら生活し、食事もまた異なる。ユダヤ教では、カシュルート(食餌規定)によって豚肉など食べることが禁じられた食物があり、さらに食用動物の屠殺法、食物の食べ合わせや調理法にいたるまで細かく規定され、これを厳密に守るユダヤ人がキリスト教徒の食卓につくことは不可能であった。さらにユダヤ人男性の多くは、髭を剃ることを禁じるユダヤ教の戒律にしたがい、頬から顎にかけて濃い髭をたくわえ、これにカフタンと呼ばれるユダヤ人特有の黒の長衣を身につければ、外見だけでユダヤ人と知れた。

詳細は別稿に譲るが⁹⁾、リトアニアへのユダヤ人の本格的な移住は14世紀にさかのぼる。商工業が未発達な農民の国であって、ユダヤ人は都市の商人や職人となり、商業や職人業にたけた者たちとしてリトアニアの領主経済体制のなかに組み込まれた。リトアニアでは、リトアニア人とユダヤ人の社会経済上の役割分担は、領主経済崩壊後も20世紀にいたるまで大きく変わることなく存続する。1923年当時で、商業に従事する者の実に約77%がユダヤ人であり¹⁰⁾、それが、かつて数世紀に渡ってリトアニアに住む人々にとっての常態であった。

ところがリトアニアという国民国家が誕生すると、この常態が異常と意識されるようになる。正確なリトアニア語も話せぬユダヤ人がリトアニアの商業や金融業や輸出入業を握り、リトアニアの都市の景観を決定している状況は、リトアニア人の独立国にとって名誉なこととは考えられなかった。

第一次世界大戦後のリトアニアは、独立はしたが、政権は安定しなかった。1919年4月の選挙で初代大統領に選出されたリトアニア民族主義運動の指導者スメトナは、1920年6月にその地位を退いた後、1926年末にヴォルデマラスとともにクーデターを執行して政権に返り咲き、以後リトアニアは、両者の属する民族主義政党である国民党¹¹の独裁支配体制へと移行してゆく。とりわけ1929年の世界恐慌によってリトアニアの経済が深刻な打撃を受けると、経済界は「リトアニア人のためのリトアニア」を唱え、政府に対してユダヤ人の経済活動からの排除を公然と要求した。

食肉や食肉加工品を扱うマイスタス、乳製品を扱うピエノツェントラス、農産物を扱うリエトゥーキスといったリトアニア人が運営する巨大な協同組合¹²が政府の援助を受け、それぞれの分野で市場を独占するようになり、協同組合から排除されたユダヤ人の商人や食品加工業者は、事実上、市場から締め出された。さらに協同組合方式の消費者向けチェーンストアは、ユダヤ人小売商の経営を圧迫した。これら、ユダヤ人から伝統的な職を奪いつつリトアニア人中産階層の育成に一定の役割を果たした協同組合は、しばしばリトアニア民族主義組織の最下部組織としての機能も果たしていた。

もし隣国ドイツでナチスが政権を握らなければ、あるいはもし第二次世界大戦がなければ、リトアニアという小国でリトアニア人とユダヤ人の社会的関係はどのように変化していったのか。この間に何らかの方向を見出すには、リトアニアの戦間期はあまりにも短い。リトアニアのユダヤ人社会はみずからの先行きを見通せないまま、1938年9月1日、自分たちの終わりの日の始まりを迎えることになる。

2 スターリンとヒトラーのはざままで

(1) 小悪としてのスターリン

1939年8月23日、反共主義者ヒトラーはソ連と独ソ不可侵条約を結び、世界を驚愕させた。この条約に両国によるポーランドとバルト諸国の分割支配を定めた秘密議定書が付随していたことは、現在では周知の事実である。9月1日にナチス・ドイツがポーランド侵攻を開始すると、東ではソ連軍が9月17日にポーランド国境を越えた。同時にソ連は、まずはエストニアからバルト三国回収のためのプログラムを開始する。バルト三国は第二次世界大戦開始後ただちに中立を宣言したが、独ソの密約の前で何の役にも立たなかった。

リトアニアは、8月の秘密議定書ではドイツの勢力圏に入ることになっていたが、戦争開始後の独ソの再交渉で、9月28日、ソ連の勢力圏に入ることが決定される。ただちにソ連は、すでにエストニアとラトヴィアに対して行使済みの手法でリトアニアに圧力をかけ、10月10日、リトアニアの防衛を名目とする相互援助条約に署名させた。これによってリトアニアには、リトアニア正規軍にはほぼ匹敵するソ連軍が駐留することになり、リトアニアの主権は著しく傷つけられたが、他方、その見返りに与えられたのが失われた首都ヴィリニウスである。ポーランドに進軍後、ヴィリニウス県を支配下においたソ連は、10月28日、ヴィリニウス市を含むヴィリニウス県の一部をリトアニアに移譲した。これによって新たにリトアニア国籍となった住民の民族別構成は、ポーランド人32万1700人、ユダヤ人10万7600人、ベラルーシ人7万5200人であるのに対し、リトアニア人は3万1200人にすぎない¹³⁾。ヴィリニウスのポーランド人は「ヴィリニウスはおまえたちのものになったが、リトアニアはロシアのものだ」と事態を皮肉ったという¹⁴⁾。事実ソ連は、相互援助条約にとどまらず、バルト三国併合の準備を着々と進めていた。

1940年5月、ソ連は、リトアニアに駐留するソ連軍兵士が組織的に誘拐されているとリトアニアを非難し、6月14日、相互援助条約に対する不誠実な態度を理由にリトアニアに最後通牒をつきつけ、政権の交代を要求した。これに抵抗しきれず、6月15日、リトアニアの内閣は総辞職する。ソ連軍がリ

トアニア国境を越え、首都カウナスに姿をあらわすなか、リトアニア大統領スメトナはドイツに亡命、6月17日にリトアニア共産党員パレーツキスを首班とするソ連の傀儡政権が誕生した。そして7月11日の深夜から翌朝にかけて、リトアニアの旧政権の政治家、軍人、知識人など約2000人が逮捕され、ソ連奥地の収容所に追放されるか処刑された後、7月14/15日に国会議員選挙が実施され、この、はじめから結果がわかっているも同然の選挙によって正式に共産党政権が発足した。7月21日の国会で国名はリトアニア社会主義ソヴィエト共和国とあらためられ、8月3日、リトアニアは形式的にはみずからの意思でソ連に加盟した¹⁵。

この政変でパレーツキス自身はリトアニア人だったが、リトアニアに自発的に政変を引き起こすに足る十分な共産主義勢力があったわけではない。共産党は1919年に非合法化されたため、戦間期に地下で活動した党員の数ははっきりしないが、6月の政変時点で推定1600人から2000人弱といわれる¹⁶。これに共産党系の諸団体のメンバーを加えても、たいした人数ではなく、人々のあいだに社会主義革命への気運があったわけではない。国家の政治的、社会的安定とリトアニア文化の振興に強力な指導力を発揮した大統領スメトナが「国民の指導者」と呼ばれて敬愛された国で、その独立を踏みにじったソ連は憎むべき占領者だった。

ところが、ここで微妙な立場に立たされたのがユダヤ人である。ユダヤ人の受け止め方は違っていた。リトアニアは、ヴィリニユスやカウナスを中心に、ナチスの魔手から逃げ出した2万5000人ともいわれるポーランド・ユダヤ人難民の避難先となっており、ユダヤ人のあいだでは、リトアニアをナチスから守ったのはソ連の赤軍だという認識が広く共有されていたからである。リトアニア人にとっては悪夢の6月15日にソ連軍が姿をあらわしたとき、ユダヤ人の、とりわけ青年たちの一部は街頭に飛び出し、熱烈にこれを歓迎する。彼らの売国奴的行為がリトアニア人の感情を害したことはいうまでもない。しかし失脚したかつての独裁者スメトナは、ユダヤ人にとっては必ずしも敬愛すべき指導者ではありえなかった。

ここではヨーロッパのユダヤ人差別の歴史に立ち入る余裕はないが、旧ロ

シア帝国の支配地域でユダヤ人の法的平等が実現するのは、1917年の革命でロシア帝国が倒れてからである。リトアニアでは、1922年にドイツのヴァイマル憲法をモデルとする民主的憲法が採択された。しかし法律上の差別がなくなっても、カトリックが政治的にも社会的にも強い影響力をもつリトアニアで、ユダヤ人に対する敵視や蔑視は厳然として存在した。

1926年末のクーデターで再び大統領職におさまったスメトナは、1928年5月には大統領の権限を強化する新たな憲法を公布する。そして、極右の秘密武装組織「鉄の狼」に支えられつつスメトナとの対立を強めるヴォルデマラスを失脚させた後、1934年夏には国民党以外のすべての政党を禁じて独裁的支配体制を確立した。極右の台頭が押さえ込まれたことにより、リトアニアのユダヤ人の地位は激変を免れたものの、スメトナのもとで経済活動からのユダヤ人の排除が進められたことは先に述べたとおりである。ユダヤ人の声を国政に吸い上げる機関は存在しなかった。ユダヤ人はリトアニア語を修得して高等教育を身につけても、公務員になる道はほとんど閉ざされており、1934年に3万5000人いた中央政府および地方行政の役人のうち、ユダヤ人は477人(1.35%)にすぎない。しかもこの人数には、ヘブライ語やイディッシュ語教育校の教師273人が含まれている¹⁷⁾。

このような状況で、将来のあるユダヤ人青年たちの絶望は大きかった。これが、すでに非合法時代からユダヤ人を共産主義運動へと引きつけた理由の一つである。1939年末で、リトアニアの共産党員の約31%がユダヤ人であったといわれる¹⁸⁾。ところが共産党政権の誕生で状況は一変した。共産党は、明確に反・反ユダヤ主義の立場をとる政党である。共産党政権のもとでは、原則的に能力さえあれば、まして共産党員であれば、ユダヤ人であっても政府の要職につくことが可能だった。以前なら、ユダヤ人は路上で暴行を受けても泣き寝入りするしかなかったが、いまやユダヤ人の警察官が誕生してリトアニア人を取り締まるという、かつては考えられもしなかったような時代が到来したのだ。

ソ連の一員にされたリトアニアでは、共産党員やコムソモール(青年共産主義同盟)の団員によって、土地や企業の国有化やキリスト教会の解体、教

会財産の没収等が進められる。このときの農地改革で富農の土地が没収され、貧農や土地なし農民は農地を手に入れたが、社会主義化の恩恵を感じた者は少なかったという。むしろ人々は、キリスト教会を破壊しているのはユダヤ人だと噂し、反ソ分子のシベリア追放や処刑を執行する政治警察NKVD(内務人民委員部)に恐れを抱いた。そしてNKVDにユダヤ人がいることに目をそばだてた。ユダヤ人がリトアニアの愛国主義者を処刑することなど、あってはならないことだった。

ソ連に対する立場の違いは、リトアニア人のユダヤ人に対する反感を決定的なものにする。しかしここで見過ごしてはならないのは、共産党はユダヤ人のための民族政党ではないということである。戦間期リトアニアのユダヤ人社会で、最も多くの支持を集めたユダヤ民族運動はシオニズムである¹⁹。しかしパレスティナでのユダヤ民族国家の建設をめざしつつ、同時に現在の居住国でユダヤ人の民族的権利の拡大を求めるシオニズムは、まさしく分離主義的民族主義としてソ連の当局の厳しい取り締まりの対象であった。他方、リトアニアのユダヤ人社会には、シオニズムも含めていっさいの世俗の政治運動にさしたる関心をもたず、敬虔なユダヤ教信仰の世界に生きる多数のユダヤ人が存在した。とくにヴィリニウスには長い歴史と名声を誇るユダヤ教学院があり、ヴィリニウスは著名なラビや学生が集まるヨーロッパのユダヤ教研究の中心地の一つだった。しかし宗教もまた、無神論の共産主義が否定するものである。それゆえ共産党政権のもとで、リトアニア人の民族主義組織やキリスト教会が解体されたのと同様、シオニストの組織もユダヤ教の組織も強制的に解体された。ユダヤ民族の権利もユダヤ教の伝統的価値観も否認する共産党員のユダヤ人とは、ユダヤ人社会から見れば、ポーランド生まれのユダヤ人共産主義者アイザック・ドイッチャーのいう「非ユダヤ的ユダヤ人」だった。

ソ連は反ユダヤ法をもたなかったが、ユダヤ人のみを優遇する法ももたない。反ソ分子と見なされたユダヤ人は、リトアニア人と同様に肅清されたし、ユダヤ人のブルジョアが経営する企業が財産没収や国有化を免れたわけでもない。社会主義化によって、商人も職人も、多くのユダヤ人自営業者が生計

の途を絶たれた。しかし、共産主義に対する嫌悪や恐怖にもかかわらず、ヒトラーとスターリンのどちらを選ぶかと問われたら、ユダヤ人にとって答えは明らかだった。ヒトラーに比べれば、スターリンは小悪だった。

(2) リトアニアのユダヤ人社会の消滅

リトアニア共産党の党員は、1941年6月で4700人ほどであったが、リトアニア人がその46.4%を占め、ロシア人やウクライナ人やベラルーシ人など、ロシア語の使用者が41%を占めていた。ユダヤ人は12.6%である²⁰⁾。多数のユダヤ人が住むヴィリニュスを取り戻したリトアニアで、ユダヤ人党員の割合は、全人口に占めるユダヤ人の割合からかけ離れて大きな数ではない。共産党は、リトアニア人の政党というイメージを作り出すため、ユダヤ人よりリトアニア人の党員獲得の方に熱心だった。他方、共産党に比べて加入の審査や手続きが簡単なコムソモールには、これまで社会的昇進の道を閉ざされていたユダヤ人青年たちがこぞって参加した。リトアニアの商工業の国有化で積極的な役割を果たしたのは、コムソモールの団員だったとされる。ユダヤ人にはロシア語を理解し²¹⁾、企業経営の経験をもつ者も多かったため、モスクワからリトアニアに乗り込んだ共産党の幹部にとって、彼らは便利な存在であった。

こうして共産党政権下のリトアニアで活躍するようになったユダヤ人は、前節で述べたように、ユダヤ人としてユダヤ人のために行動していたのではない。にもかかわらずリトアニア人がユダヤ人に支配されていると感じ、ユダヤ人の存在がその実数以上にリトアニア人の神経を逆撫でしたのは、何よりも彼らが、キリスト教世界の賤民であったユダヤ人に指導され、管理されることに慣れていなかったためであろう。さらに、ユダヤ人はみな共産主義の共感者に違いないというリトアニア人の思いこみは、彼らの意識のなかでは、これまで自分たちが公然とユダヤ人を差別してきた事実によって十分な裏付けを与えられていた。ユダヤ人差別を禁じる共産主義によって地位が逆転したと信じるリトアニア人は、自分たちにとって外側から降りかかった災いであるポリシェヴィキの支配とユダヤ人の支配とを重ね合わせた。ユダ

ヤ・ポリシェヴィキとは、反共・反ユダヤのナチスが唱えたスローガンだが、リトアニアではこのスローガンが真実味をもつものを感じられた。リトアニア人は、ナチス・ドイツがリトアニアからポリシェヴィキとユダヤ人を追い払ってくれることを期待した。

この立場を最も先鋭に代表したのが、ナチスの影響と支援を受けたリトアニアで最大規模の対ソ抵抗組織LAF(リトアニア活動家フロント)である。LAFは1940年11月17日に、元駐ベルリン・リトアニア大使シュキルパによって創設された。1941年3月24日に発行されたLAFの「リトアニア解放のための指針」によれば、LAFは独ソ戦を不可避と見ており、ドイツがソ連に侵攻を開始し、リトアニアから「赤いロシア人」が駆逐され、リトアニアの独立が回復される時こそ、ユダヤ人をもリトアニアから金輪際厄介払いする好機と見なしていた。なぜならユダヤ人は、敵の前でリトアニア国民を裏切ったからであった²⁰。ユダヤ人に対する報復を訴える宣伝文書は、LAFの地下組織によってドイツからリトアニア各地に持ちこまれた。

そのリトアニアで、人狩りという語がふさわしいほど大規模な反ソ分子の逮捕とソ連奥地の収容所への追放が行われたのは、1941年6月13日の夜半から14日の未明にかけてのことである。対象は、旧リトアニア軍の軍人やブルジョア、ソ連に敵対的と見なされた知識人や学者の他、なぜ自分が逮捕されるのか理解できぬ人々も多数であった。追放は家族単位で行われ、一家族100キロまでの身の回り品をまとめる短時間の猶予が与えられた後、子供も年寄りも容赦なく収容所へと向かう貨車に詰めこまれた。追放は6月14日以後も1週間に渡って継続され、姿を消した者は1万5000人という説から3万5000人とするものまでである。このポリシェヴィキの蛮行に終止符を打ったのは、まさしく6月22日の独ソ戦の始まりだった。

1941年6月22日の朝、ドイツ軍による空爆で目を覚ましたとき、リトアニア人は自分たちの解放の時が来たことを知る。戦闘準備のできていなかったソ連軍が撤退を始めると、LAFは、かねて計画していたとおりカウナスで武装蜂起した。22日のうちにほぼ市街戦を制したLAFは、翌23日の9時30分にはラジオ・カウナスからリトアニア国歌を流し、ドイツ軍の到着以前にリトア

ニアの独立回復と暫定政府の誕生を告げた。ソ連に対する蜂起は、LAF以外にも各地で自然発生的に結成されたパルチザン部隊によってリトアニア全土に急速に広まる。蜂起に加わった者は、カウナスとその近郊で約4000人、リトアニア全土で1万6000人から2万人との推定から、リトアニア全土で10万人と推定するものまであり、正確なことは不明である²³⁾。そのとき叫ばれたことは「1年前、ユダヤ人どもに花束で迎えられたポリシェヴィキのリトアニア抑圧者は、パルチザンの銃弾と榴弾で見送られる」ということだった²⁴⁾。

そして、今度はドイツ軍がリトアニア人の花束によって迎えられるなか、6月25日から混乱と興奮のリトアニアで開始されたのが、逃げ遅れた共産主義者の処刑とユダヤ人に対するポグロム(ユダヤ人に対する暴行と殺戮)だった。

カウナスでユダヤ人が集中して住んでいたのは、カウナス城からネリス川をはさんで対岸に位置するヴィリヤンポレ(ユダヤ人のあいだではスロボトカと呼ばれた)である。いくつかの目撃証言によれば、そこに斧とのかぎりを携えたパルチザンが入り、家から家を回ってユダヤ人の頭を切り落とし、のかぎりで身体を二つに切り裂いた。ヴィリヤンポレの主席ラビは、ユダヤ教の聖典タルムードの上で頭を切断されたのち、頭は出窓にさらされ、そこには「同じことがすべてのユダヤ人に行われる」と書かれていた²⁵⁾。

この時期のポグロムのなかでも衝撃的な写真やフィルムによって記録されているのが、カウナスのリエトゥーキス協同組合の馬車置き場で発生したユダヤ人の撲殺である。

このポグロムについては内容的に異なるいくつかの証言が残されており、いつ誰によって執行されたのか、いまだ明らかにされていないのだが、6月26日の夜、ポグロムの現場からさほど離れていないヴィータウタス大通りのカトリック教会の墓地で、赤軍との戦いで死んだパルチザンたちの埋葬が行われたという。翌27日の早朝、墓地の聖堂でそれら戦死者のためのミサが行われたが、ポグロムが始まったのは、同じ27日の日中だったとされる²⁶⁾。

50人から60人のユダヤ人の男性が馬車置き場に連れ込まれ、そこに堆積する馬糞を素手で片づけるように命じられ、その作業が終わったところで鉄槌

を用いての撲殺が始まった。残された写真や証言によれば、ナチスとカウナス市民が見物するなか、鉄槌を握っていたのは、腕にリトアニアのバルチザンの印である白い腕章をつけた者や、ドイツ軍によってソ連時代の監獄から解放されたばかりの政治犯やごろつきたちであった。倒れたユダヤ人には馬車を洗うためのホースで水がまかれ、息を吹き返すと、再び死ぬまで殴打が続いた。そのあいだナチスは、ユダヤ・ポリシェヴィキに対するリトアニア人の怒りの「自然な爆発」をプロバガンダ用の写真やフィルムに収めた。ポグロム執行者の1人は、死体の山に登り、アコーディオンでリトアニア国歌を弾いたという。殺戮が終わると、別のユダヤ人のグループが連れてこられ、死体の処理と血の海となった馬車置き場の清掃を命じられる。死体はトラックに乗せられ、どこかに運び去られた。

独ソ戦開始後、混乱の2週間のあいだに殺害されたユダヤ人はリトアニア全土で7000人から1万人といわれる²⁷⁾。小さな町や村では、そのユダヤ人全員がシナゴグに詰め込まれて焼き殺され、1日にしてユダヤ人住民が全滅したところさえあった。

最初の殺戮が一段落すると、ナチスは「リトアニア人からのユダヤ人の保護」を口実に、ユダヤ人住民の隔離を開始する。カウナスでは、1941年8月末までに、ヴィリヤンポレに設置されたゲトトへのユダヤ人の移動が完了し、もとは小さな木造家屋に1万5000人が住んでいた地区に約3万人のユダヤ人が押し込まれた²⁸⁾。カウナスのユダヤ人口は独ソ戦が始まった時点で約4万人であったから、戦争開始後の2カ月間に1万人のユダヤ人が姿を消したことになる。その後ナチスは、労働力として使用可能なユダヤ人とそれ以外のユダヤ人とを選別しつつ、彼らにとって不要なユダヤ人の殺害を執行していった。そのおもな殺害現場となったのがカウナス郊外の第九要塞²⁹⁾である。カウナスのゲトトでホロコーストを生き延びることができたユダヤ人は約2000人で³⁰⁾、15世紀以来続いたカウナスのユダヤ人社会は事実上消滅した。

カウナスに比べてリトアニア人が少数であったヴィリニウスでは、リトアニア人による大規模なポグロムこそ発生しなかったものの、独ソ戦の開始直後に大量のユダヤ人が殺戮されたことは同様である。独ソ戦開始当時のヴィ

リニユスのユダヤ人口は5万7000人程度と推定されているが、1941年9月にゲッソーへのユダヤ人の移動が終わったとき、残っていたユダヤ人は4万人前後である。さらにその数は、1941年末には1万2000人から1万5000人にまで激減した。ヴィリニユスのユダヤ人の大量殺害が行われたのが、ヴィリニユス郊外のポナリの森³¹⁾である。ヴィリニユスのユダヤ人でホロコーストを生き延びたのは、2000人から3000人といわれる。

リトアニアのホロコースト犠牲者数についてはさまざまな推定があるが、控えめな数をあげれば、1941年1月1日のリトアニアのユダヤ人口は20万8000人で、そのうち19万5000人から19万6000人が殺害された³²⁾。

3 ホロコーストの記憶

(1) リトアニア人とホロコースト

リトアニアでのホロコーストに関して、ナチスが責任をおうべきことは言をまたない。しかし、リトアニア人はユダヤ人社会の消滅に対していっさいの責任を免れているのか。リトアニア人とホロコーストのかかわりについては、一般に、ユダヤ人研究者がユダヤ人生存者の証言に依拠しながらリトアニア人の自発的関与を強調するのに対し、リトアニア人研究者はナチスによる誘導を重視する点で、歴史家の見解は大きく二つに分かれる。

たとえば、みずからホロコーストを生き延びたカウナスのユダヤ人の1人であるドヴ・レヴィンが、すでにドイツ軍の到着以前にリトアニアの少なくとも40箇所でリトアニア人がユダヤ人を殺害したとする³³⁾のに対し、アルフォンサス・エイディンタスなどリトアニア人歴史家は、パルチザンの目的はソ連軍の駆逐であり、ユダヤ人そのものは彼らの関心事でもなければ、ソ連軍追撃のさなかにそのようなことをしている余裕もなかったとする。このときリトアニアでは、LAFの指揮下にも、まして6月23日に成立した臨時政府の指揮下にも属さぬパルチザンたちがバラバラに行動していた。ユダヤ人の共産主義者が彼らの襲撃の対象になったことは確かだろうが、それとユダヤ人の無差別殺害とは区別されなければならないとする³⁴⁾。そして前節の(2)で述べたヴィリヤンポレでのポグロムに関して、ナチスによる誘導を強調す

る歴史家が依拠するのが、特別行動隊の隊長シュタールエッカーの報告書である。

特別行動隊は、ナチスの親衛隊保安部および保安警察の派遣部隊で、独ソ戦のあいだドイツ軍と行動をともにし、軍事占領直後の現地で治安確立の任務にあたった。そのさいユダヤ人の大量殺害を執行したことで悪名高い。シュタールエッカーが、ドイツ軍の先発部隊および特別行動隊の少人数の先遣隊とともにカウナス入りしたのは、おそらく6月25日に日付がかわったころであった³⁵⁾。シュタールエッカーは、1941年10月1日までのバルト地域での作戦行動についてまとめた報告書のなかで、次のように述べている。

バルト諸国の人々がソ連併合時代にポリシェヴィズムとユダヤの支配によって被った大きな苦しみを考えれば、彼らはみずからの手で、赤軍撤退後になお自国に残っている敵どもの徹底的な処分を行うものと予想された。それゆえ「保安警察の任務は、自己浄化運動を始動させ、定められた粛清目標にできるだけ早く到達するよう、運動を正しい方向へと導くことでなければならなかった。少なからず重要なことは、後のために、ドイツ側の指図をさとられることなく、解放された人々は、みずから自発的にポリシェヴィキとユダヤという敵どもに対してきわめて厳しい措置をこうじたのだという、確固として立証可能な事実を作り出すことだった。

リトアニアでは、これは、カウナスにおいてはじめて、パルチザンの出動によって成功した。驚いたことに当地では、はじめはユダヤ人ポグロムを開始させることは簡単ではなかった。そのさい真っ先に動員されたのが、上述のパルチザン・グループのリーダー、クリマイティスであり、彼は、カウナスに出動した[特別行動隊の]小先遣隊によって与えられた指示にもとづき、外部にはドイツ側からの指図や示唆が気づかれぬよう、ポグロムを始めることに成功した。6月25日から26日にかけての夜の最初のポグロムのあいだに1500人以上のユダヤ人がリトアニアのパルチザンによって殺害され、多くのシナゴークが、放火されるか、他の方法で破壊され、約60軒の家があったユダヤ人街は焼け落ちた。続く夜のあいだに同様のやり方で2300人のユダヤ人が殺害された。リトアニアの他の地域では、カウナスの場合と類似の行動が

より小規模にはあるが起こされ、それは、残存していた共産主義者も対象としていた³⁶。」

引用文中の「上述のバルチザン」とは、シュタールエッカーによればカウナスで互いに独立に行動していた4隊のバルチザン・グループをさす。シュタールエッカーは、そのなかからさしあたり300人を選んで特別行動隊の補助部隊を結成し、その指揮をリトアニア人のジャーナリスト、クリマイティスに委ねた。そしてシュタールエッカーは、カウナスをはじめとして、リトアニア各地で特別行動隊の指導のもとでナチスに敵対する分子の掃討に従事し、大量のユダヤ人を殺害したのはこの部隊であったとしている³⁷。

独ソ戦の前にバルチザンによってまかれた宣伝文書は、リトアニア国民を裏切ったユダヤ人に対して報復を唱えていた。LAFの蜂起によって成立したリトアニアの臨時政府も、6月27日の会議の議事録によれば、リエトゥーキスで行われた「LAFの司令部とも政府ともまったく関係のない者たち」による無秩序な制裁に遺憾の意を表明しつつも、ユダヤ人に対する制裁そのものは否認していない。すなわち「その共産主義活動ならびにドイツ軍に危害を与えたことに対して、ユダヤ人に執行されるべきあらゆる措置にもかかわらず、バルチザンおよび個々の市民はユダヤ人の公開処刑をやめなければならない」というのである³⁸。

シュタールエッカーの報告は、共産主義者とユダヤ人の掃討というナチスの世界観の実現を念頭において記述され、そこでは、一貫してみずからのイニシアティブが強調されている。しかし彼の報告を全面的に信用するとしても、いったんナチスの挑発に乗ったバルチザンたちは、ナチスの道具というより、有能にして積極的な協力者でありえた。ソ連に併合されたリトアニアでは、人々のあいだに不満がくすぶり、まして身内や知り合いをソ連の当局によって処刑された者やシベリア送りにされた者たちは、しかるべき復讐の機会を待っていたからである。リエトゥーキスで殺害されたユダヤ人が共産党の関係者だったのかどうか不明だが、多くの見物人の前で行われたユダヤ人に対するリンチと殺害は、そのようなリトアニア人にとって、不満や憎悪を吐き出させる役目をはたすと同時に、ユダヤ人には、途方もない恐怖とし

て記憶されることになる。ユダヤ人は、リトアニアという国においてあらゆる隣人を失い、まったく孤立無援の状態に追い込まれたことを痛感した。

7月4日付けの『イシュライスヴィンタス・パネヴェジエティス[解放されたパネヴェジース市民]』は、ドイツによるリトアニアの独立の回復を期待し、次のように書く。

「リトアニア市民よ！ 可能なかぎりドイツ軍に協力しよう。われらの森や茂みが、すみやかにユダヤ人やポリシェヴィキやその他わが社会の異分子どもから浄化されるように。リトアニアの裏切り者どもから浄化されるように³⁹⁾。」

しかしナチスには、リトアニアの再独立を認める気などはじめからなかった。1941年7月末から8月はじめ、軍政から民政への移行にさいしてリトアニアは、ラトヴィアやエストニアとともにドイツの東部最高司令官管轄地オストランドに組み入れられた。パルチザンは7月はじめには早々に武装解除され、リトアニアの暫定政府も7月末に活動停止を命じられる。そのためドイツに幻滅したパルチザンの一部は反独・反ソの抵抗運動の組織化に向かったが、他方でナチスは、パルチザンの少なからぬ者たちをナチス支配下のリトアニアの行政府や警察の要員に組み入れていった。そしてそのなかには、人びとのあいだで「ヴォルデマールス一派」と呼ばれた「鉄の狼」の団員も多数含まれていた。独ソ戦で戦線がドイツ軍の限界以上に拡大してしまったナチスにとって、このような現地協力者がいなければ、占領地での治安維持やホロコーストの執行は不可能だっただろう。カウナスの第九要塞やヴィリニュスのポナリの森へのユダヤ人の連行と射殺に深く関わったのは、これらリトアニア人のナチス協力者たちであった。

だが、再び、ここでの厄介な問題は、こうしてホロコーストの協力者となったリトアニア人⁴⁰⁾は、ナチスと同じ意味での人種的反ユダヤ主義者だったのかということである。ポナリの森でナチスの手先となったリトアニア人たちは、大きく穿たれた穴の前に裸のユダヤ人を並ばせ、背後から銃殺した。銃殺が繰り返されるごとに、穴は折り重なるユダヤ人の死体で埋まっていった。そのときリトアニア人の心に去来した感情とは、いかなるものだったの

だろうか。繰り返し述べたように、リトアニア人のあいだでユダヤ人は共産主義者と同一視され、共産主義はリトアニアにとっての災いであった。この点で鉄の狼の団員は確信的な反共主義者だったが、そうでなくても共産党政権に深い恨みを抱く者はいくらでもいた。しかし、それでも彼らの関心はリトアニアを越えるものではなく、おそらく彼らにとって、ナチスの唱える人種的世界観やその実現などはどうでもよかつただろう。

独ソ戦の開始直後にリトアニア人をとらえた期待と興奮が過ぎ去ってしまえば、あるいはナチスの協力者となった多くの者たちにとって、ユダヤ人殺害はたんなる生活の手段だったのかもしれない。ポナリの森の近くに住み、そこで繰り返されたヴィリニユスのユダヤ人の大量虐殺の目撃者となったポーランド人、カジミェシュ・サコーヴィチは、銃殺されたユダヤ人が残した物をてきぱきと分け合うリトアニア人を観察しながら、日記に次のように記している。「ドイツ人にとって300人のユダヤ人は300人の人類の敵だ。リトアニア人にとっては、それは300足の靴に300本のズボンだ⁴⁴。」貧しいリトアニア人たちは、殺されて空き家になったユダヤ人の家に当然のごとく住みつき、彼らの家財道具を自分たちのものにした。

リトアニア人のなかには、みずからの危険を承知でユダヤ人を匿い、ヴィリニユスのゲットーで組織されたユダヤ人の対ナチス抵抗運動を支援した者たちもいたが、他方でユダヤ人に衝撃を与え、ホロコーストを生き延びた者たちから再びリトアニアで生活を築く気持ちを失わせたのは、当時の多くのリトアニア人のユダヤ人に対する無関心、ユダヤ人を殺すことに対する罪の意識の薄さであった。ユダヤ人殺害の動機やそれに由来する責任について考えることは、殺害を命じる側のナチスに任せておけばよいことだった。リトアニア人の頭のなかでは、彼らとユダヤ人とは別の世界にすむ者たちであり、ユダヤ人の運命は、自分たちの運命の一部ではなかった。

(2) 森の兄弟とホロコーストの記憶

ユダヤ人社会の消滅は、リトアニア人のあいだでどのように記憶されたのだろうか。先取りして言えば、第二次世界大戦後にリトアニア人が体験した

恐怖が、彼らのホロコーストの記憶をかぎりなく後景に押しやってしまうことになる。

独ソ戦の開始後、再独立の夢を絶たれたリトアニアは、ナチス・ドイツによって食糧や労働力を徴発され、多くのリトアニア人が戦争で労働力不足に陥ったドイツの農村へと連行された。そのためリトアニアでは、1941年秋には、反独、反ソの立場でリトアニアの解放をめざす抵抗組織が活動を開始する。しかし結局1944年の夏、リトアニアを解放したのはソ連軍だった。これをもってリトアニアは、ナチスの手からソ連へと連れ戻されたが、それは、リトアニア人にとっては新たな戦闘の始まりだった。

スターリンの率いるソ連は、終戦後、ソ連にとって軍事的にも経済的にも重要な位置を占めるバルト三国を迅速に、また確実にソ連の体制へと組み込むため、まずはソ連に敵対的と見なされた人々の徹底的な排除に乗り出す。エストニアやラトヴィアと同様、リトアニアでも、独ソ戦直前の1941年6月の人狩りの再現のごとく、終戦後ただちに、反共主義者や民族主義者と見なされた者や、戦争中ナチスに協力した者たちの逮捕や処刑、富農や反ソ的知識人のソ連奥地への強制移住が開始された。かわりにリトアニアには、ロシア本土からソ連支配にとって有用な人材が送り込まれた。農業の集団化など、戦争で中断された経済活動の社会主義化も容赦なく実行に移された。しかしソ連によるリトアニアの再支配は、決してすんなりといったわけではない。リトアニアの独立回復をめざすパルチザンが、民衆の支持を受けつつ森林地帯を隠れ家とし、ソ連に対して熾烈なゲリラ戦を挑んだからである。村々は、昼間はソ連の支配下にあったが、夜はパルチザンが支配者というありさまだった。

人々から「森の兄弟」と呼ばれたパルチザンの数は、3万人とも5万人とも言われる。ソ連によるパルチザン殲滅作戦は残忍を極めたが、両者の戦いに巻き込まれたのは武器を持った者たちだけではない。拷問によって人間の原型をとどめぬほど痛めつけられたパルチザンの死体が見せしめのために町の広場にさらされ、そのパルチザンの身内や関係者の嫌疑をかけられた者は、一網打尽に捕えられてソ連奥地へと送られた。森で孤立したパルチザンたち

は、食糧の調達のために村人を襲い、場合によっては一家を皆殺しにした。あるいはソ連の協力者と見なしたりトアニア人も、裏切り者として殺害した。ソ連の当局は、パルチザンからの人心の離反をねらい、偽のパルチザンを放ってリトアニア人を襲撃させたため、村人には、誰が本物のパルチザンなのか見分けがつかなかった⁴²⁾。

こうして第二次世界大戦の終了後、パルチザン殲滅作戦が終了する1953年頃までに、パルチザンの関係者であれ、集団農場に入ることを拒否した農民であれ、ソ連奥地へと連れ去られたリトアニア人は15万人にのぼるといわれる⁴³⁾。リトアニアのような人口の少ない小国では、身内や知人にスターリン時代の迫害の犠牲者が1人もいない者の方がむしろ少数であろう。

この恐怖体験とともに、さらに戦後のリトアニアでホロコーストの記憶を曖昧にすることになったのが、ソ連の公式の歴史学によるナチスの犠牲者の匿名化である。ソ連では、2600万から2700万人もの犠牲者が出たといわれる第二次世界大戦は大祖国戦争と呼ばれる。すなわち戦争はソ連の国民が一丸となって戦ったのであり、この戦いの犠牲者において、ある民族のみを特権的に語ることは許されなかった。第2節で述べたカウナスの第九要塞やヴィリニユスのポナリの森など、ユダヤ人が大量に殺害されたいくつかの場所には慰霊碑が建てられたが(図1)、ソ連時代の慰霊碑に「ユダヤ人」という語は出てこない。ポナリの森の慰霊碑には、リトアニア語とロシア語で次のように書かれていた。

「ここポナリの森で1941年7月から1944年7月まで、ヒトラー一派は10万人以上のソヴィエト市民を銃殺した。そして自分たちの犯罪の痕跡を隠すため、ファシストの占領者たちは1943年12月から銃殺された者たちの死体を焼いた。」

ナチスに殺された者の多くがユダヤ人であり、その殺害にあたってリトアニア人協力者がいたことは、ソ連時代に必ずしもタブー化されていたわけではない。しかしソ連時代の学校で教えられた公式の歴史学によれば、ナチスに協力したのはリトアニアの反革命的ブルジョア・ナショナリストや、戦間期のリトアニアで反人民的な公安や警察の協力者だった者たちなど、1940年



図1 ポナリの森にたつ慰霊碑(2003年筆者撮影)
 ソ連時代に建てられたリトアニア語(左)とロシア語(右)の慰霊碑(碑文については本文167ページ参照)にはさまれて、現在では中央に、上から順にイディッシュ語(注5)参照)、ヘブライ語、リトアニア語、ロシア語で書かれた慰霊碑が建っている。イディッシュ語の碑文では、リトアニア人の関与と犠牲者の大半がユダヤ人であったことが次のように明記されている。「ここポナリの森で、1941年から1944年までのあいだに、ヒトラーに率いられた占領者とその現地協力者が10万の人々を殺害した。そのうち7万人はユダヤ人である。」

にリトアニアがソ連に組み込まれたことによって損害を受けたと感じた社会のくずたちであった。また、このような者たちの犠牲者として強調されたのは、ユダヤ人というより、ドイツ軍の侵攻前に逃げるができなかった共産主義者や、ソ連の諸組織のメンバーたちであった。そして彼らブルジョア・ナショナリストこそ、1944年のソ連によるリトアニアの解放後、森に潜み、海外の帝国主義国の秘密諜報機関と結びついて反革命活動を継続した者たちだとされた。

このようにソ連の公式見解がナチス協力の罪を「ブルジョア・ナショナリスト」に帰したことによって、一般のリトアニア人はホロコーストへの加担という重荷を取り除かれ、自分たちはもっぱらナチスの犠牲者でいられたの

だが、他方、ソ連の言う「ブルジョア・ナショナリスト」こそ、リトアニア人のあいだで英雄視された「森の兄弟」に他ならない。すなわちリトアニア人は、ユダヤ人のことを忘れる一方で、「ブルジョア・ナショナリスト」が自分たちにとってどのような人たちであったか、自分たちがソ連の体制によっていかに迫害されたかは忘れなかった。

しかし、リトアニア人の英雄たちはみな潔白なのだろうか。第二次世界大戦後、ソ連の当局によってリトアニア人のナチス協力者の追及が行われるなか、国外に逃亡できなかつた少なからぬ者たちが森に逃げ場を求めた。これについては、ロシア生まれで現在アメリカに住むユダヤ人作家フェリクス・ロジネルの『藤色の煙』が興味深い。ロジネルがリトアニア人の友人から聞いた実話をもとにした小説である。主人公のユダヤ人青年ヨシケは、独ソ戦のあいだ親と離ればなれになってソ連の奥地で過ごした後、1945年、故郷のリトアニアに帰ってきた。そのヨシケがたどり着いた両親の家で出会ったのは、いまでは森のバルチザン部隊の隊長になった幼なじみのリトアニア人ヴラダスだったが、ヴラダスこそ、戦争中、ヨシケの両親をはじめ、村のユダヤ人を殺害した張本人だったのだ⁴¹。

おわりに

——マイノリティであることの困難とマイノリティに対することの困難

リトアニアは1991年にソ連からの独立をはたし、2004年5月1日、ラトヴィア、エストニアとともにEU(ヨーロッパ連合)への加盟をはたした。これまでのリトアニアで、ナチス・ドイツとソ連の犠牲者としての意識のみが強烈であったとすれば、もはやリトアニアが被害者の役割だけを演じていればよい時代は終わった。

EU加盟に先立ち、1995年頃からリトアニアでは、ひとつには旧西側世界からの外圧によって、またひとつにはリトアニア人自身の内側からの努力によって、ナチスへの協力問題も含め、自国の過去を批判的に検証する作業が開始されている。森の兄弟は、ソ連時代は語ってはならないタブー中のタブーだったが、やがて森の兄弟の名誉回復も行われるだろう。それは前節の

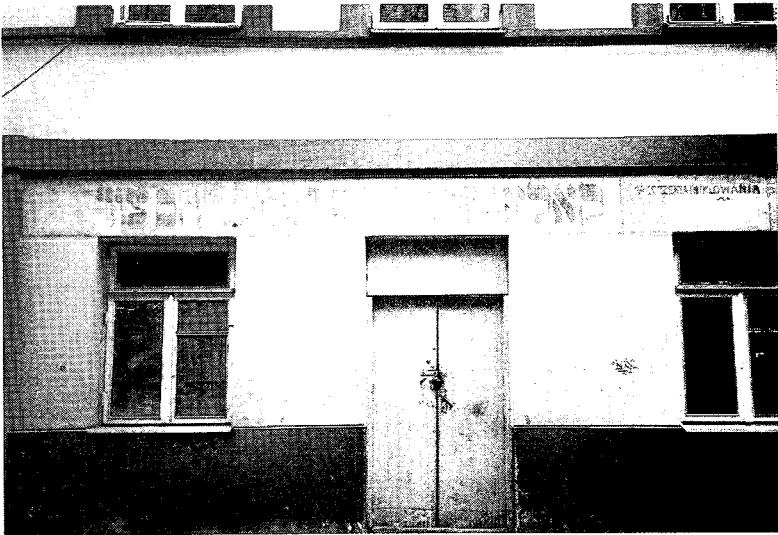


図2 ヴィリニウスの旧ユダヤ人街にあったユダヤ人の商店(2003年筆者撮影)

看板にはイディッシュ語で「輸入品商アブラハム・ツヴィ」と書かれている。社会主義時代に上塗りされたペンキを落とし、現在では原形のまま保存の対象とされている。

(2)で述べたように、たんなる名誉回復にとどまらず、他面で痛みをともなう作業とならざるをえまいが、この痛みをくぐり抜けることなくしてリトアニアという国家の真の独立はありえない。

最後に、本稿を締めくくるにあたって考えてみたいことがある。ある国家においてマイノリティであるとはどういうことだろうか。リトアニアのユダヤ人が体験した困難は、本稿で述べたとおりである。だが他方で、マイノリティに対することの困難の方はどうだろうか。

独立後のリトアニア政府は、リトアニア人がホロコーストに加担した事実を認め、ユダヤ人に対して正式に謝罪した。いま首都ヴィリニウスの旧ユダヤ人街を歩けば、要所に取り付けられた慰霊のプレートによって、私たちは、この街のユダヤ人に起こった悲劇を知ることができる。これも、ホロコーストに向かい合おうとするリトアニアの姿勢のひとつの表れだ。わずかに残さ

れたかつてのユダヤ人の生活の痕跡や文化遺産は、政府の手で保護され(図2)、リトアニアのユダヤ人たちは、再び自分たちの文化的、宗教的活動を再開した。

しかしリトアニアの真摯な謝罪の気持ちにもかかわらず、かつて、リトアニア人とは母語も宗教も風俗習慣も異なるユダヤ人がリトアニアの四大都市の人口の3分の1前後を占め、リトアニアの商工業を握っていた状況が、はたして現在のリトアニア人にとって復帰すべき正常な国家のあり方と考えられるだろうか。「はじめに」で述べたように、いまリトアニアは第一次世界大戦後に独立を達成したときの国家の原点に立ち返り、自分たちの国家の歴史を再出発させようとしている。しかしその原点は、当時のリトアニア人にとっての「ユダヤ人問題」がいまはなくなっているかざりて、現在のリトアニア人にとって正常なのではないだろうか。あるいはさらに言えば、第二次世界大戦後にリトアニアに入ったロシア人移民の問題が当時は存在しなかったかざりて、その原点は現在のリトアニア人にとって正常なのではないだろうか。

いや、これはリトアニア人だけの問題ではない。私たちもまた、異質の他者がいないことを正常と考える感覚において、リトアニアの多くの人々に共感していることに気づく。たとえマイノリティであることの困難を理解しえたとしても、私たち自身の問題として、マイノリティに対することの困難を克服するのは容易なことではない。

●注

- 1) ポーランドとソヴィエト・ロシアのあいだで講和が成立するのは1921年3月である(リーガ条約)。
- 2) クライベダ(ドイツ語名メーメル)は、第一次世界大戦まで東プロイセンの一部であった。住民の多数はドイツ人であったが、最終的に1924年5月のクライベダ協定によってリトアニアの領有が国際的に承認された。しかし1938年にヒトラーは同地の返還を要求、翌年3月の条約でクライベダは再びドイツに併合された。
- 3) Dov Levin, *The Litvaks. A Short History of the Jews in Lithuania*, Jerusalem

2000, p.136.

- 4) これに対して西ヨーロッパでは、19世紀を通じてユダヤ人のそれぞれの居住国への言語的、文化的同化が進行した。例えばドイツでは「ユダヤ教を信仰するドイツ人」を名乗る者が現れる一方、ユダヤ人の民族的アイデンティティは見失われた。
- 5) イディッシュ語はドイツ語圏に定住したユダヤ人のあいだで9世紀から10世紀頃誕生したといわれ、音韻や文法構造はドイツ語に似るが、文字はヘブライ文字を用い、右から左へ横書きされる。注4)で述べた同化の過程で、西ヨーロッパではイディッシュ語はユダヤ人自身によって放棄されたが、東ヨーロッパではユダヤ人の生きた言語であり続けた。

ヘブライ語は古代ユダヤ人の言語であったが、ローマ時代にユダヤ人の離散が本格化した後、紀元2世紀頃には話し言葉としての機能を失った。以後ヘブライ語は、ユダヤ教の聖典や典礼の言語として学ばれ、伝えられたが、各地に離散したユダヤ人にとっては唯一の共通語でもあった。このヘブライ語をユダヤ人の日常言語として現代に復活させ、その普及を推し進めたのがシオニストである。ヘブライ語の近代化において、1881年にパレスティナに移住したリトアニア出身の言語学者エリエゼル・ベン・イエフダの功績はよく知られる。ヘブライ語こそユダヤ人の民族言語であると主張するシオニストは、イディッシュ語はユダヤ人が離散を余儀なくされた結果誕生した屈辱の言語であるとし、イディッシュ語にユダヤ人の民族言語をもとめるイディッシュ語主義者と激しく対立した。

戦間期のリトアニアでは、ユダヤ人の児童に対してイディッシュ語あるいはヘブライ語で教育を行う小学校の設置が公認されたが、多くの児童がヘブライ語教育校を選択し、1937/38年当時でイディッシュ語教育校を選択した者は、ユダヤ人小学校に通う児童の15%程度にすぎない(Levin, *op.cit.*, p.149)。第一次世界大戦前まで、ヘブライ語で書かれた教科書はパレスティナからリトアニアへもたらされたが、1920年代になると、リトアニアで作成されたさまざまな科目のヘブライ語教科書がユダヤ人の住む各国へと送り出されるようになった(Masha Greenbaum, *The Jews of Lithuania*, Jerusalem 1995, p.265.)

- 6) 吉野悦雄『複数民族社会の微視的制度化分析——リトアニアにおけるマイクロストーリー研究』北海道大学図書刊行会、2000年、42頁。
- 7) 戦間期リトアニアのユダヤ人の教育については Levin, *op.cit.*, p.144-151 を見よ。
- 8) 太陰暦に従うユダヤ教の新年は9月の後半か10月初めにはじまる。

- 9) 近代以前のポーランド＝リトアニア国のユダヤ人の状況については、拙稿「恩讐の彼方——東ガリツィアのポーランド人・ユダヤ人・ウクライナ人」(『民族』ミネルヴァ書房、2003年所収)および拙稿「ガリツィア・ユダヤ人の窮乏」(『金沢大学経済学部論集』第23巻第1号、2002年)を参照。
- 10) Ezra Mendelsohn, *The Jews of East Central Europe between the World Wars*, Bloomington 1983, p.226.
- 11) 1916年にロシアで結成されたリトアニア人の最初の民族主義政党「国民進歩党」を前身として1924年に結成された。「リトアニア民族主義連合」と訳す方が正確であるが、慣例的に「国民党」と訳される。
- 12) マイスタスは食物や食品を、ピエノツェントラスはミルク・センターを意味し、リエトゥーキスは、リトアニア農業協同組合連合の略称である。
- 13) 吉野、前掲書、45頁。
- 14) Michael MacQueen, *The Context of Mass Destruction: Agents and Prerequisites of the Holocaust in Lithuania*, in: *Holocaust and Genocide Studies*, Vol.12, No. 1, 1998, p.32.
- 15) 日本領事代理としてカウナスにいた杉原千畝が、ポーランド・ユダヤ人難民の求めに応じて日本の通過ビザ(「杉原ビザ」として知られる)を発給するのは、まさにこの時期のことである。詳しくは拙稿「杉原ビザとリトアニアのユダヤ人の悲劇」(『歴史と地理・世界史の研究』第581号、山川出版社、2005年所収)を参照。なお同拙稿の注(1)で、国際社会によるリトアニアの独立の承認をソ連との紛争解決後の1920年としたが、正確には本稿で述べたように、ヴィリニウスの帰属問題が解決した1922年6月末である。この場を借りて訂正しておきたい。
- 16) Alfonsas Eidintas, *Jews Lithuanians and the Holocaust*, Vilnius 2003, p.133. Dov Levin, *The Jews in the Soviet Lithuanian Establishment, 1940-41*, in: *Soviet Jewish Affairs*, Vol.10, No. 2, 1980, p.24.
- 17) Levin, *The Litvaks*, p.141.
- 18) Eidintas, *op. cit.*, p.126. 共産主義運動の基盤は都市部にあった。ユダヤ人比率の高さには、ユダヤ人に都市居住者が多かったことも関係している。
- 19) しかしシオニズム陣営は決して一枚岩ではなく、その政治的主義主張やユダヤ教に対する立場に関してさまざまな会派に分裂していた。シオニズムに反対し、現在の居住国でのユダヤ人の民族自治の権利を求めるユダヤ人の社会主義政党ブンド(「リトアニア・ポーランド・ロシア全ユダヤ人労働者同盟」の略称)は、党が設立された(1897年)ヴィリニウスでは一大勢力を形成した

- ものの、ヴィリニユスを失った戦間期リトアニアでは影響力をもたなかった。ブンドはイディッシュ語をユダヤ人の民族言語と見なしたが、注5)で述べたように、イディッシュ語教育校を選択する児童はごく少数であった。
- 20) Liudas Truska, *Litauische Historiographie über den Holocaust in Litauen*, in: Vincas Bartusevičius, Joachim Tauber u. Wolfram Wette (Hg.), *Holocaust in Litauen*, Köln/Weimar/Wien 2003, S. 270.
- 21) 1935年1月の国民党の会合でスメトナは、ユダヤ人のあいだにリトアニア語に十分な敬意を払わずロシア語を使用する者がいることを非難し、次のように述べている。「彼らはリトアニア語を必要とされる程度ほども学ばず、さらに彼らに特徴的なことは、公の場で隣国[ロシア]の言語を好んで使用することだ。[中略]演説で自分たち自身の言語[であるイディッシュ語やヘブライ語]を使用しない場合、なぜリトアニア語ではなく、隣国の言語の使用に執着するのか。このような疑問の声があがるのも理由のないことではない。」(Eidintas, *op. cit.*, p.89. []内は引用者による補足。以下同様。)
- 22) MacQueen, *op. cit.*, p.34.
- 23) Valentinas Brandišauskas, *The June Uprising of 1941*, in: *Lithuanian Historical Studies*, No. 3, 1998, p.71.
- 24) Joachim Tauber, *14 Tage im Juni*, in: *Holocaust in Litauen*, S. 46.
- 25) Eidintas, *op. cit.*, p.179-180. Yitzhak Arad, *The Murder of the Jews in German-Occupied Lithuania (1941-1944)*, in: Alvydas Nikžentaitis, Stefan Schreiner & Darius Staliūnas (ed.), *The Vanished World of Lithuanian Jews*, Amsterdam/New York 2004, p.178. ボグロムにはドイツ人も加わっていたという証言も残されている。
- 26) このボグロムに関する証言については Eidintas, *op. cit.*, p.185-191 を見よ。ボグロムは6月25日あるいは26日に発生したとの証言もあり、Eidintas は、ボグロムが一度ではなく、同じ場所で二度発生した可能性を指摘している。
- 27) Alexander Neumann, *Leben und Sterben im Ghetto Kaunas 1941*, in: *Holocaust in Litauen*, S. 146. 吉野, 前掲書, 49頁。
- 28) Neumann, *ebd.*
- 29) ロシア帝国支配下の19世紀末に要塞都市化されたカウナスで、第九要塞の建設は1902年に始まり、第一次世界大戦前夜に完成された。第二次世界大戦中、ソ連の支配下で第九要塞はNKVDの監獄として使用され、ドイツ軍侵攻後は、ナチスによる5万人以上の人々(そのうち3万人以上がユダヤ人)の処刑場となった。

- 30) Israel Gutman (ed.), *Encyclopedia of the Holocaust*, Vol.2, New York/London 1990, p.827.
- 31) リトアニア語では「パナレイ」であるが、研究文献の多くは当時のポーランド語による呼称にしたがっているため、ここでも「ポナリ」とした。
- 32) Arūnas Bubnys, *The Holocaust in Lithuania: An Outline of the Major Stages and their Result*, in: *The Vanished World of Lithuanian Jews*, p.218.
- 33) Levin, *The Litvaks*, p.218.
- 34) Eidintas, *op. cit.*, p.177.
- 35) *Ibid.*, p.182.
- 36) *Ibid.*, Supplement No. 1, p.466-467. シュタールエッカーはKlimaitisをKlimatisと誤記している。報告で述べられている60軒の家屋の焼失については、Aradが前掲論文の178頁で紹介しているポグロムの目撃者 Garfunkel の回想録に放火の記述があるものの、他には火災の発生を立証する史料や証言は残されていないという。
- 37) *Ibid.*, Supplement No. 1, p.461-462. ただし前章で述べたリエトゥーキス協同組合でのポグロムについては、その手はずを整えたのはクリマイティスではなく、ヨナス・ダイナウスカス(シュタールエッカーは Dainauskas を Denauskas と誤記している)だとする同時代史料が存在する(*Ibid.*, p.185)。1928年からリトアニアの保安警察の高官であったダイナウスカスは、シュタールエッカーのもとでナチスに協力するリトアニア人警察隊を率いた。1992年に公刊されたダイナウスカスのエッセイによれば、シュタールエッカーは6月25日の午前3時過ぎにダイナウスカスらソ連占領以前のリトアニアの保安警察官たちと会見し、そのさいユダヤ人に対するポグロムについて示唆を与えたという。しかしダイナウスカス自身は、リトアニア人警察官のポグロムへの関与を否認するばかりか、暗に、当時カウナスその他で発生したポグロムをシュタールエッカーの捏造としてポグロムの事実そのものを疑問視する説を支持している。ダイナウスカスは1945年1月にソ連によって逮捕、投獄されるが、9カ月後には脱走してポーランドに逃れ、その後1961年から2000年に死亡するまでアメリカ合衆国に住んだ(*Ibid.*, p.183 および p.186 の注(36)を見よ)。
- 38) *Ibid.*, p.204.
- 39) Brandišauskas, *op. cit.*, p.61.
- 40) その人数についてはさまざまな推定がある。Eidintas, *op. cit.*, p.310 以下を見よ。

- 41) Kazimierz Sakowicz, *Ponary Diary 1941 - 1943*, ed. by Yitzhak Arad, New Haven / London 2005, p.16.
- 42) リトアニアの森の兄弟については、畑中氏による先駆的紹介がある(畑中幸子『リトアニア』NHKブックス, 1996年)。
- 43) Eidintas, *op. cit.*, p.349. その他10万人とする説や24万人とする説もある。吉野, 前掲書53頁。鈴木徹『バルト三国史』東海大学出版会, 2000年, 124頁。
- 44) フェリックス・ロジネル, 沼野充義訳「藤色の煙」『中央公論文芸特集』1993年春季号, 所収。作品に添えられた沼野氏によるエッセイ「神話と政治のあいだで」も見よ。「藤色の煙」に関して, 沼野氏より有益なご教示をいただいた。

付記：リトアニアの地名およびリトアニア人の人名の読み方については, 名古屋大学大学院文学研究科博士課程でバルト・スラヴ語を専攻され, 現在, 大阪外国語大学でリトアニア語を担当されている櫻井映子氏に教えていただいた。この場を借りて御礼申し上げたい。